攻撃的ユーモアの対人的機能に関する研究動向と課題
― ユーモアの発信者と受信者という「立場」の観点から ―

本郷 亜維子[†]

本稿では，集団における社会適応という進化的視点を，ユーモアの対人的機能を検討するための重要な枠組みと捉え，攻撃的ユーモアの対人的機能に関する先行研究について，発信者と受信者という「立場」の観点から改めて見直した。その際社会心理学的研究を中心に (1)攻撃的ユーモア特性 (2)からかい (3)誹謗中傷ユーモア (4)笑いに関する領域の研究を取り上げた。これらの研究結果から，攻撃的ユーモアの対人的機能は立場によって，また同じ立場でも短期的もしくは長期的といった時間的な観点によっても，適応的になる場合も不適応になる場合もあることが明らかとなった。この問題の背景には，遊びの状態という共有認識を抜け道的に解釈して利用することで，向社会的な目的と反社会的な目的を同時に達成できるという攻撃的ユーモア独自の特徴があることが推測された。この問題の解決には，ユーモアの意図が重要な役割を担っていることを示唆した。従って，攻撃的ユーモアの対人的機能の適応性を検討するためには，意図性を中心に親密度や感情などの関連要因について検討する必要がある。また，意図推測に影響を与えるバイアスや社会的望ましさ，笑いなどの要因についても考慮する必要性を述べた。本稿では，個人の攻撃的ユーモアに関する研究課題に対して，集団適応という進化的視点から問題を整理することによって解決の方向性を示唆した。

A Review of the Interpersonal Functions of Aggressive Humor: From the Standpoint of Sender and Receiver of Humor

Aiko Hongo

Considering the evolutionary perspective of social adaptation in groups as an important framework for examining the interpersonal function of humor, this article reviewed the literature on the interpersonal function of aggressive humor from the sender's and receiver's "standpoints." Specifically, this article focused on social psychological research on (1) the characteristics of aggressive humor, (2) teasing, (3) disparagement humor, and (4) laughter. Behind this issue lies a feature of aggressive humor, which is that the shared perception of a state of play can be used for both prosocial and antisocial purposes. These findings suggest that the intention of humor plays an important role in resolving this issue. Therefore, in order to examine the interpersonal functions of aggressive humor, it is necessary to clarify the relationship between intentionality and intimacy, emotion, bias, social desirability, and laughter. In this article, a review of previous studies from the perspective of group adaptation suggested a possible solution to the problem of research on aggressive humor in individuals.

1. はじめに

1.1 ユーモアの定義と進化的視点

ユーモアとは，面白いと感じる心的現象であると定義する（上野，1992）場合と，そこに面白さや笑いを引き出すユーモア刺激や，感情的反応など全てを含み幅広く定義する（Martin，2007 野村・雨宮・丸野訳2011）場合がある。ユーモアは認知・感情・身体・社会に関わる様々な領域に渡って研究されている。そのうちのひとつである進化生物学的な研究では，類人猿などの社会的集団を形成する動物の研究によって，笑いがどのように発達・進化したのかについて検討されている。

進化論的仮説によれば，笑いやユーモアはその状況が安全な遊びの状態を示すシグナルであり（Ramachandran，1998），ひとが集団で生きていくための対人コミュニケーションのモードとして進化してきた（Vaid，2002）と考えられている。この仮説では，笑いやユーモアは主に集団における社会適応のための機能であると仮定されている。例えば，深刻な状況や脅威を遊びのなかで安全に予行練習するための社会的学習機能（Weisfeld，1993）や，互いに笑い合うことによって集団内の感情的な結束を強固にする自集団維持機能（Dunbar，1996），またユーモアの攻撃性

[†]博士後期課程在籍中（人間科学プログラム）

によって，自集団もしくは集団内における自己の社会的地位の維持・向上機能（Alexander，1986）などの仮説が提唱されている。このような集団における社会適応のためという進化論的仮説は，類人猿と同じ社会的集団を形成して生活するヒトを対象とした研究を行う際にも，基本となる重要な枠組みを提供するものである。

これらの進化論的仮説は，ユーモア理解における個人内の言語的・認知的なメカニズムも，集団のなかで生き残るために備わった機能であることを示している。個人が感じる面白さに効果があるかどうかには，それが社会への適応に効果的かどうかが重要であると推測される。従って，他者との関わりにおけるユーモアの機能に着目することは，個人内におけるユーモアの機能を理解するためにも重要である。

ユーモアの対人的機能とは，何らかのメッセージを周囲の人とやり取りする際に使われるユーモアの働きである。従って，他者とのコミュニケーションというプロセスは必要不可欠である。しかし，これまでの社会心理学領域のユーモア研究は，必ずしも集団への社会適応という枠組が重要視されていない。そこで本稿では，これまでの社会心理学領域におけるユーモア研究の問題点を，進化的視点から整理し直し，課題解決のための方向性を提示することを目的とする。

本稿では，これまでの研究を進化的視点から捉え直すために，ユーモアを発信する側と受信する側という「立場」という観点を集団への社会適応の枠組みとして使用する。これは，ユーモアを介したメッセージのやり取りが，どのような結果をもたらすのか検討する際に「誰にとっての」どのような結果かが重要となるからである。あるユーモアを発信した者にもたらされる結果と，同じユーモアを受信した者にもたらされる結果は常に同じとは限らない。従って，ユーモアの発信者，受信者という「立場」に注目することは，これまでの先行研究を集団への社会適応の枠組みとして捉え直すために必要な観点である。

1.2　攻撃的ユーモアの特徴

本稿では，他者や他集団を傷つけるような形態を持つ攻撃的なユーモアに焦点を当てた。攻撃的ユーモアは，相手を傷付ける，けなす，コケにする，笑いものにするために，皮肉（Irony），嫌味（Sarcasm），からかい（Teasing），誹謗中傷（Disparagement humor）などに使われるユーモアである（Martin, Puhlik-Doris, Larsen, Gray & Weir, 2003）。ただそれぞれの言葉が指している内容は，文化によってニュアンスが異なっている。例えば，日本では皮肉と嫌味は明確に区別できないことも多く，また仲間同士のからかいに使われる攻撃的ユーモアと，いじめや誹謗中傷に使われる攻撃的ユーモアとの間に，明確な線引きをすることも困難である。しかし，攻撃的ユーモアは表面的な攻撃性を示すという点では共通している。

攻撃的ユーモアに注目するのは，他のユーモアには無い独自の特徴があるためである。それは対人場面で使用される攻撃的ユーモアが，自集団における協調や結束といった向社会的な目的と，他者や他集団を排除・非難するといった反社会的な目的を同時に達成できるという逆説的なものである。この特徴を説明するために，まず全てのユーモアに共通する前提条件について最初に説明する。

まず，ユーモアの対人的機能が働く前提条件として，ユーモア・マインドセット（Bateson，1955）の存在が指摘されている。これは ⑴ユーモアとしてカッコ付きで表現された内容は深刻に捉えなくていい，⑵そのカッコ内の内容は本気ではなく遊びであるという人々が持つ暗黙の了解のことである。ユーモア・マインドセットを他者と共有することによって，目の前の深刻さや脅威を認知的に安全な状態で統制できると考えられている。この共有認識の働きは，ユーモア全般に共通する暗黙の了解のようなものであり，先に述べた進化論的仮説とも整合する。

攻撃的ユーモアにおいてはこの共有認識に，以下の前提条件が加えられる。⑴深刻に扱う必要がないほどユーモアの対象は価値が低い，⑵本気ではなく遊びなので報復はできないというユーモア・マインドセットである。つまり攻撃的ユーモアを使用し，⑴対象の価値下げや ⑵関与度低下，面子保持という認識を利用することで，攻撃可能なほど親密な間柄であるということを表現したり，攻撃側の安全性を保つことなどが可能となる（Ford, Richardson, & Petit, 2015）。このように，攻撃的ユーモアは全般的なユーモアの共有認識と，それを抜け道的に解釈することで共有できる認識を両方持っている。それによって，ユーモアが示す遊びの状態という認識を，向社会的な目的と反社会的な目的どちらにも利用することができるという独自の特徴を持つ。向社会的な目的とは，危険や責任から身を守りつつ仲間と感情を共有し，自集団の協調・結束を高めることである。また反社会的な目的とは，対象を貶めたり，たとえ表面的にでも攻撃することで，他者や他集団を排除・非難することである。また，両方の目的を同時に達成することも可能である。そのため攻撃的ユーモアでは，表面的な攻撃性を敢えて示すことが向社会的なメッセージになり，遊びであること自体が反社会的なメッセージにもなるという一見矛盾した前提条件を持つ。しかしこの逆説的な特徴こそが，攻撃的ユーモアにとって重要な機能であり，単なる敵対的発言や親和的なユーモアにはない特徴である。私たちはこのあいまいで逆説的な特徴があるからこそ，集団における社会適応に利用されてきたと考えられる。

1.3　展望の対象領域と概要

本稿では，社会心理学領域におけるユーモア研究を中心に，次の４つの研究領域を取り上げる。⑴個人のユーモア特性，⑵からかい，⑶差別や偏見などの誹謗中傷，⑷笑い，これらに関する攻撃的ユーモアを対象とした研究及び，対象ではないが関連する研究について概観する。

最初に，⑴個人のユーモアの好みや使用傾向に関する特

性研究を基に，攻撃的ユーモアが抱えている問題を指摘する。ここでは，特性研究のような個人のユーモアを研究するためにも集団への社会適応という枠組が重要であることから，その視点の欠如すなわち攻撃的ユーモア独自の特徴が，考慮されていないために生じる問題について指摘する。次に，⑵からかいに関する研究を基に，問題解決の具体的な方向性を探る。ここでは主に，攻撃する側とされる側という2者の対人関係を扱った先行研究に注目する。それらの結果を進化的視点から整理し，ユーモアの意図の役割の重要性や，意図性に関連する親密度や感情などの要因を検討する必要性を指摘する。更に，⑶誹謗中傷ユーモアの研究を基に，進化的視点としての「立場」に新たな観点を追加した。新たな観点とは，ユーモアの機能の過程を考慮し，その機能が短期的な適応性もしくは長期的な適応性の結果であるかといった時間的な観点である。最後に，⑷ユーモアと関連する笑いを扱った研究を取り上げる。これまで笑いそのものは社会心理学領域ではあまり注目されてこなかったが，意図を推測するための情報としての笑いについて，進化的視点から検討する必要性を指摘する。

また，「冗談のつもりだった」と弁解されるような攻撃的なユーモアの対人的機能を理解することは，いじめや誹謗中傷などの深刻な社会問題の解決に有用な示唆を与える。そのため本稿では，攻撃的ユーモアの不適応な側面だけでなく，適応的な側面についても同様に取り上げる。これは，攻撃的ユーモアが，向社会的な目的と反社会的な目的を同時に達成できるという逆説的な特徴を持つこととも関係する。この特徴によって，協調・結束などのポジティブな効果と，排除・非難などのネガティブな影響とが，表裏一体となってお互い支え合っている可能性がある。そのため，攻撃的ユーモアの不適応な側面のみを対象に研究し，ネガティブな影響を抑制する有用な示唆を得ることは難しいと考える。従って，不適応な側面だけでなく適応的な攻撃的ユーモアの機能も同様に理解することが重要である。例えば，親和的な目的の冗談で相手を傷付けてしまうなどの，誤ったユーモアの使用を防ぐことにも繋がると指摘されている（塚脇，2018）。

ここからは具体的な先行研究を示しながら，攻撃的ユーモアの対人的機能についてこれまでに明らかになったことや，まだ充分に検討されていない問題について議論していく。まず攻撃的ユーモア特性の研究を基に，進化的視点としての「立場」という観点から問題点を整理し，検討すべき課題を指摘する。

2.　攻撃的ユーモア特性に関する先行研究

2.1　ユーモアセンス及びユーモアスタイル

攻撃的ユーモアに限らず全般的に高いユーモアセンスを持つひとは，魅力的であると他者から高く評価されている（Sprecher, & Regan, 2002）。しかし攻撃的なユーモアセンスに限定すると，決して同じように高く評価されていない。例えば，他者からの攻撃的ユーモア評価の高さは，ソーシャルサポートや親密度の低さと正の関連がみられる（Cann, Zapata, & Davis, 2011）。また受信者が感じるネガティブ感情も他のユーモアより高く，その人とまた話したいと思うかという交流の希望度も低いという結果が報告されている（Kuiper, Kirsh, & Leite, 2010）。

ユーモアセンスなどの特性研究においては尺度による調査研究が主流であり，攻撃的ユーモア特性を測る尺度もこれまでに複数作成されてきた（尺度のレビューとしてCasu, Gremigni, 2012）。なかでもMartin et al.（2003）の作成したHSQ: Humor Styles Questionnaireは突出して多くの研究で使用されている。この尺度は適応 ― 不適応の次元と対自己 ― 対他者の次元によって，ユーモアスタイルを自己高揚的ユーモア（適応・対自己），親和的ユーモア（適応・対他者），自虐的ユーモア（不適応・対自己），攻撃的ユーモア（不適応・対他者）の４つに分類している。このHSQを使用した研究では，攻撃的ユーモアスタイル得点の高さと，反社会的パーソナリティ傾向の高さに関連がみられた（e.g., Martin, Lastuk, Jeffery, Vernon, & Veselka, 2012）。

攻撃的ユーモア特性は，受信者としての傾向と発信者としての傾向を併せた個人特性と捉えることができる。実際HSQには，「誰かを非難したり，こき下ろしたりする手段として，ユーモアを使うのは，好まない（吉田，2012）」という受信者の立場での質問と，「嫌いな人がいたら，しばしばユーモアやからかいでその人を攻撃する（吉田，2012）」という発信者の立場の質問が混在している。

HSQはこの他にも様々な尺度の問題点が指摘されている。例えば，塚脇・平川（2012）はユーモアを使用する動機があいまいであることを指摘し，ユーモアを表面的な形態と使用動機に分類して研究を行った。その結果，関係構築動機による攻撃的ユーモアの使用と，主観的幸福感やソーシャルサポートの高さに正の関連がみられ，攻撃的ユーモアのポジティブな対人的機能が示された。このように動機に焦点を当てたことによって，立場が発信者に規定され，攻撃的ユーモアには反社会的な目的による機能だけでなく，親密さを示すなどの向社会的な目的による機能もあることが示唆された。

他にも，攻撃的ユーモア因子のWell-beingへの効果が，使用される形態や文脈によって変化すること（Ruch, & Heintz, 2017）や，発信者が受信者に肯定的な感情を持つ場合が考慮されていないために，攻撃的ユーモア下位尺度の信頼性係数が低いこと（雨宮，2014）などが指摘されている。これらの問題はどれも，攻撃的ユーモアは，向社会的な目的と反社会的な目的を同時に持つという逆説的な特徴が考慮されていないことに起因している。

そこで次に，対人ユーモアコーピングの研究を基に，攻撃的ユーモアの対人的機能に焦点を当て，引き続き問題点と検討すべき課題について指摘する。

2.2　対人ユーモアコーピング

ユーモアコーピング研究においては尺度による調査研究の他に，実験的研究が行われてきた。実験的研究とは，例えば，実験参加者に不快な動画を視聴させるなどの負荷を与え，ユーモア鑑賞や作成の介入によるストレスの緩和効果を検証する実験などである（e.g., Cann, Calhoun, & Nance, 2000; Newman, & Stone, 1996）。

対する尺度研究では，ユーモアコーピング傾向の高さと精神的健康やWell Beingとの関連がみられる結果などが報告されている（e.g., Kuiper, Martin, & Olinger, 1993; Nezu, Nezu, & Blissett, 1988）。しかし，ストレス緩和効果がみられなかった研究もあり（Korotkov, & Hannah, 1994），これまでのユーモアコーピング研究全般において，一貫したユーモアの効果はあまり示されていない。

ユーモアコーピングの尺度研究では，主に形態を特定しない全般的なユーモアを扱った尺度（Martin, & Lefcourt, 1983; Thorson, & Powell, 1993）がこれまで使用されてきた。国内においては，対人ストレスユーモア尺度（椙本・山崎，2010）や，ユーモアコーピング尺度（本郷，2019）が作成されているが，攻撃的ユーモアが含まれていなかったり，含まれるが対人コーピングに限定されていない尺度となっている。これまでのユーモアコーピングの研究結果の多くは，攻撃的ユーモアの不適応な側面を示すものであった（Martin，2001）。

対人ユーモアコーピングに関する研究の1つに，104組の夫婦を対象にしたCambell, & Moroz（2014）の研究がある。この研究で使用されたのは，de Koning, & Weiss（2002）が作成した関係性ユーモアコーピング尺度（RHI: Relation Humor Inventory）である。この尺度は夫婦間でのユーモアの使用傾向を測定するものであり，自分もしくは相手のポジティブユーモア，ネガティブユーモア，道具的ユーモアという6つの下位尺度から構成されている。Cambell, & Moroz（2014）はRHIと夫婦葛藤尺度，及び夫婦の話し合いの様子を観察したデータの分析を行った。その結果，自分のネガティブユーモアコーピング得点の高さと，相手の否定的な反応態度傾向の高さの関連が示された。RHIでは，自分のユーモアに関する質問では発信者として，相手のユーモアに関する質問では受信者として回答している。しかし，このように立場が規定されたRHIにもHSQと同様に，攻撃的ユーモアの適応的な側面が測定されていないという問題がある。例えば「冗談だよと言って吹き飛ばす（著者訳）」は相手のネガティブユーモアの項目に，「冗談だよと言って自分を守る（著者訳）」は自分の道具的ユーモアの項目に含まれている。そのためRHIでは，責任から自分を守るために使われたネガティブユーモアについては検討されておらず，攻撃的ユーモアの道具的コーピングすなわち適応的コーピングの側面が測定されていない。

このようにこれまでの尺度研究では，発信者にとっての適応的な側面が示すものは少なく，受信者や調査対象者が属する集団にとっての不適応な側面を示すものが多かった。その理由のひとつとして，攻撃的ユーモアが不適応であることを前提としていたことが挙げられる。そのために，攻撃的ユーモアの不適応な側面は明らかにされてきたが，適応的な側面が十分に検討されてこなかった可能性がある。逆説的な特徴を持つ攻撃的ユーモアの適応性を検討するには，その適応的な側面についても明らかにしていく必要がある。

本節では個人のユーモア特性の研究について，攻撃的ユーモアの適応的な側面に関する研究が不足していることを課題として指摘した。次に，ユーモアの対人関係に焦点を当てたからかいの研究を挙げながら，課題の解決についてより具体的な方向性を探っていく。

3.　からかいに関する研究

3.1　意図と意図推測

攻撃的ユーモアのひとつであるからかい（Teasing）は，相手を意図的に批判したり攻撃したりすると同時に，その相手との親密さや愛情を表現するという逆説的な性質を持った行為である（Keltner, Young, Heerey, Oeming, & Monarch, 1998）。この性質は攻撃的ユーモアが持つ逆説的な特徴とも一致している。

からかいに関する研究では，実際の会話を言語学的なアプローチから検討したり，からかいの場面を設定して会話を観察するなど，具体的な攻撃的ユーモアが対象とされている（レビューとしてHaugh，2017）。また，からかう側（Teaser）とからかわれる側（Target）といった対人関係における立場を明確にした研究が行われ，両者の認識の違いが明らかにされてきた。攻撃的ユーモアの発信者は，基本的に親和性や愛情に注目したポジティブな意図を持ちやすく，反対に受信者は，批判や攻撃性に注目したネガティブな意図を推測しやすいということが示唆されている（e.g., Endo, 2007; 遠藤，2008; Keltner et al., 1998; Kim, & Palomares, 2022; Kruger, & Gordon, 2006）。また，ユーモアの意図を明示すると，受信者が推測する発信者の意図の親和度が高くなり，発信者との親和度の差が減少することも明らかとなっている。このことから，攻撃的ユーモアの解釈においてその言動の意図は重要な役割を持つと指摘（Kruger, & Gordon, 2006）されている。

同じことは，ユーモアを含まない偏見や差別的言動の攻撃性判断を検討した研究（Almagro, Hannikainen, & Villanueva, 2022; Swim, Scott, Sechrist, Cambell, & Stangor, 2003）でも指摘されている。つまり，発信者は攻撃的ユーモアを使用した自己の比較的敵意のない意図を手掛かりに，被害結果を推測する。それに対して発信者の意図が分からない受信者は，被害結果としての自己の不快感情を手掛かりに，発信者の敵意ある意図を推測することで，結果として両者の判断や解釈に差が生じると推測され

ている。

このような研究結果から，前節で挙げたRHI（de Koning, & Weiss, 2002）において，同じ攻撃的ユーモアが発信者にとっては道具的ユーモアであり，受信者にとってはネガティブユーモアとなった理由が推測される。責任や報復からユーモアで「自分を守る」ことはポジティブな意図として，相手がユーモアで夫婦の問題を「吹き飛ばす」程度の価値だと示すことはネガティブな意図として推測されやすかったのだと考えられる。

前節で，攻撃的ユーモアの適応的側面の検討を課題として指摘した。課題を解決するためには，攻撃的ユーモアの被害認識や解釈の手がかりとなる意図性が，重要な役割を持つことが示された。次に，この意図性に関連する具体的な要因として親密度とバイアスの影響について論じる。

3.2　親密度とバイアス

これまでの研究で，この解釈の差を調整する要因についても検討されており，発信者と受信者の親密度が高い方が，被害認識の差が小さいと報告されている（葉山・桜井，2008; Hay, 2000; Kruger, & Gordon, 2006）。これは親密度が高いほど多くの認識が共有され，発信者の意図が受信者に正しく伝わりやすくなったためだろう。また，同じ受信者であっても自分が攻撃の標的となっている方が，標的でない受信者よりも被害認識の影響が強かったという報告もある（Swim et al., 2003）。このことから，受信者の不快感情は意図推測の重要な情報として利用されていることが示唆される。

また，からかいや攻撃的ユーモアを扱った研究ではないが，自分の意図が，相手に伝わっていると過大に推測する傾向について検証した研究もある（武田，2000; 武田・沼崎，2007）。これは意図の透明性の錯覚（Gillovich, 1998）と呼ばれる自己中心性バイアスの1つである。このバイアスは発信者だけでなく受信者にも生じ，自分は相手の意図を理解できていると過大に推測する傾向が報告されている。

武田・沼崎（2007）の研究では親密度が高い方が，発信者と受信者の両者により大きな錯覚が生じていた。一方のからかいの研究では，親密度が高い方が被害認識の差が小さかった。この親密度による差の減少と，錯覚の増大という結果が示された理由のひとつとして，受信者は基本的にネガティブな意図推測から出発し，親密度の高さによって意図推測がポジティブに偏って錯覚・調整され，結果的に被害認識の差が小さくなった可能性などが考えられる。

攻撃的ユーモアの適応性を検討するためには，発信者の意図や受信者の意図推測が重要な鍵となるが，意図性には親密度やバイアスが影響することが示唆された。従ってこれらの先行研究を踏まえ，発信者の意図と受信者の意図推測を明らかにすると同時に，親密度やそれに伴うバイアスの影響についても考慮する必要がある。

ここまで攻撃的ユーモアの逆説的特徴による研究課題を指摘し，解決のために検討すべき具体的な要因を提示した。次に，誹謗中傷ユーモアの研究を取り上げ，進化的視点としての「立場」に追加するユーモアの機能の過程を考慮した新たな観点について論じる。

4.　誹謗中傷ユーモアに関する研究

4.1　差別・偏見的ユーモア

攻撃的ユーモアのなかでも，特に差別・偏見的なユーモアは誹謗中傷ユーモア（Disparagement humor）と呼ばれ，その心理的過程や影響について近年多くの研究が行われている。人種，性別，性的志向や宗教などに関する差別・偏見的ユーモアを使用した誹謗中傷を扱ったものが多く，主に受信者を対象に具体的なユーモアを用いた実験的研究が行われてきた（e.g., Borgella, Howard, & Maddox, 2020; Ferguson, & Ford, 2008; Ford, & Ferguson, 2004; Thomae, & Pina, 2015）。

差別・偏見的ユーモアと中立的ユーモアの影響の違いを検証した研究では，差別的なジョークを提示された群の方が自発的な抑制が緩和され，通常なら抑制後に高まるとされるリバウンド効果が減少した（Ford, Teeter, Richardson, & Woodzicka, 2017）。この結果は，Ford, & Ferguson（2004）が提唱するユーモアの偏見的規範理論を支持するものであった。この理論では，ユーモアによって偏見的態度が高まるメカニズムが説明されている。これはユーモアで示された遊びとしての規範が，他者の笑いや自己の肯定的感情を介して，暗示的に受容・承認されたと解釈されることで偏見的態度が高まるというものである。ユーモアによって抑制が緩和され，後のリバウンドが減少するという効果は，一定以上の偏見的態度得点の高い個人においてみられた傾向であった。そのため，全ての人の偏見を助長するものではなく，もともと持っている偏見を解放するメカニズムとして機能することが示唆されている（Mendiburo-Seguel, & Ford, 2019）。

現代の社会において偏見を抑制しないことは多くの場合不都合な事態を招くが，ユーモアで表現することすなわち遊びの状態を作り出すことによって，面子を守り責任を回避した安全な状態で偏見を解放することが可能となる。リバウンド効果によって周囲に差別・偏見的な言動が行われる，またそれによって報復を受ける恐れがあることを考えると，この抑制解放機能は，爆発を防ぐためのガス抜きのような攻撃的ユーモアの適応的機能のひとつだと言える。

その一方で，不適応な機能を示した研究結果も存在する。Ford, Woodzicka, Petit, Richardson, & Lappi（2015）が行った研究では，差別・偏見的ユーモアやそれに対する笑いの存在自体が，差別が受け入れられているという社会的サインとして，受信者に悪影響を与える可能性があることが示唆された。この実験では，性差別的ユーモアは中立的ユーモアよりも女性の自己客体化を高め，性差別的コメディの視聴は男性よりも女性の否定的自己焦点化を高めた

という結果が示された。この結果から，ユーモアで遊びの対象物として性別が扱われたことによって，その性別を持つ自己に客体化すなわちモノとして注意を向ける傾向が高まった。それと同時に，ユーモアで示された女性という性別の価値下げが，社会に暗示的に承認されたと解釈され，女性としての自己への否定的意識が高まったことが推測される。また，同じ性差別的ユーモアを扱った研究でも，標的にされた受信者と発信者の親密度が高い場合には，標的にされた女性の受信者は不快に感じていなかったという報告もある（Hack, Garcia, Goodfriend, Habashi, & Hoover, 2020）。

これらの結果から，女性の受信者にとっての性差別的ユーモアには，親密度を高めるという短期的な適応的機能があると同時に，同じ女性の受信者にとって，主体性を奪われるという長期的に不適応な結果をもたらす機能もあることが示された。従って，ユーモアの適応的機能について研究するには「立場」だけでなく，その機能が短期的な適応性による結果か，長期的な適応性による結果に至るものかといった時間的な観点も併せて考える必要がある。

誹謗中傷ユーモアに関する領域の研究では，実際の社会場面において，攻撃的ユーモアがどのように機能しているのかという対人的機能の過程が明らかにされてきた。その結果，攻撃的ユーモアの適応的な機能と不適応な機能の両方が示され，同じ受信者という立場であっても短期的，長期的な両方の機能が明らかとなった。またそれぞれの研究で想定される機能の過程は，集団への社会適応という枠組みにおける適応性が，結果としてポジティブに働いたのか，ネガティブに働いたのかを示していた。

新たに加えた時間的な観点は，ユーモアの特性研究においても議論されている（Martin, 2007 野村他訳 2011）。しかし，その観点は受信者にとっての結果ではなく，発信者がなぜ不適応な攻撃的ユーモアを使用するのかを説明するための観点である。攻撃的ユーモアを使用するのは，発信者にとって他者や他集団を排除・非難するなどの短期的な適応性があるからであり，仲間との協調などの長期的な適応性を犠牲にしていると想定されている。このような想定からも，これまでのユーモアの特性研究では，攻撃的ユーモアが発信者や受信者にとって，長期的に不適応であることが前提とされてきたことが示唆される。そのため，これまであまり取り組まれてこなかった攻撃的ユーモアの適応的な側面について検討する場合，短期的，長期的という時間的な観点も併せて検討する必要がある。

次に，攻撃的ユーモアは他者への危害が規範違反とされる社会において，他のユーモアよりも社会規範との関係が深いことから，攻撃的ユーモアと社会的規範の関連について検討していく。

4.2　社会規範との関係

道徳性心理学の考え方を背景とする誹謗中傷ユーモアの研究では，攻撃的ユーモアの適応性を調整する要因のひとつとして規範意識が取り挙げられている。

道徳心理学において，規範の違反は嫌悪感を誘発すると示唆されていることから，McGraw, & Warren（2010）は規範違反条件と統制条件で異なるシナリオを用いて，ユーモアの面白さを測定する実験を行った。この実験では，父親本人から「好きにしてくれ」と言い残された父の遺灰に対する息子の行動というシナリオなどが使用された。この場合の規範違反条件は「その灰を吸った」であり，統制条件は「その灰を埋めた」というシナリオであった。その結果，統制条件よりも規範違反条件の方が面白いと評価し，息子の行動を完全に不道徳もしくは完全に許容できると評価したものより，不道徳かつ許容できると評価したものの方がより面白さを感じていた。また教会への関与度を測定し，教会に関するユーモアの面白さを評価させた結果，関与度が低い方がより面白さを感じていた。これらの結果を基にユーモアの良性違反理論が提唱された（McGraw, & Warren, 2010）。この理論では，ユーモアが良性で面白いと感じるには，ある規範では違反であると同時に，他の規範では許されているという条件が必要だと想定されている。 先のシナリオの場合，遺灰を吸うのは不道徳であるという規範に違反すると同時に，父親から好きにしていいと言われたことで他の規範では許されているという条件が当てはまるため，面白いと評価したということになる。また，標的とされた内容と一定の心理的距離が保てることも必要な条件とされ，ユーモアの標的である教会との心理的距離が遠い者は条件に当てはまるため，心理的距離が近い者より面白いと評価した。その後の研究によって，普遍的道徳観とユーモアへの感情的反応との関連や，道徳性への脅威が中程度のユーモアが最も面白いと感じられる（Kruschke, & Vollmer, 2014; Koszalkowska, & Wrobel, 2019）など，良性違反理論を裏付ける結果も示されている。

この良性違反理論の実験において扱われたユーモアは，不快ではあるが表面的な攻撃性は示しておらず，攻撃的ユーモアの定義には完全に当てはまらない。しかし，からかいに関する先行研究において，受信者の不快感情が意図推測のための重要な情報であったことから，ユーモアの面白さの評価や不快感などの感情は重要な指標である。従って，このような個人の道徳観や，標的との心理的距離など，攻撃的ユーモアの面白さを調節する要因として検討する必要があるだろう。

また社会規範は他者を説得する材料や，自己の行動を正当化するためにも使われる（飯田，2016）。このことから，攻撃的ユーモアに関する自分の言動を正当化して報告するなどの社会的望ましさの影響についても配慮すべきである。特に社会心理学領域においては，自己報告による回答を使用してユーモアの研究が行われることが多いため，質問の仕方や実験デザインにおいても，他者の視線や一般的な価値観を意識させる，またはさせないことによる影響などについても検討する必要がある。

本節では，より現実場面に近い実証的な研究を基に進化的視点における「立場」に時間的な観点を追加した。また，社会的規範が面白さなどの感情を調節する要因となる可能性や，社会的望ましさの影響についても言及した。最後に，ユーモアと関連する笑いについて進化的視点から扱う必要性について議論する。

5. 笑いに関する研究

笑いには大きく分けて2つの形態がある。1つは反射的な脳のシステムによる感情と連動した不随意的な笑いである。もう1つは感情とは連動しない自発的な笑いであり，前者とは神経経路が部分的に異なるものである（Wild, Rodden, Grodd, & Ruch, 2003）。

会話の中で発生する笑いは大部分が会話の内容とは関係なく，円滑なコミュニケーションのために使われる。これは社会的な信号として後者の笑いに分類される（Smoski & Bachorowski, 2003）。ただし，ある笑いが真の愉悦からの笑いか，社会的信号の笑いなのかはあいまいで（Gervais, & Wilson, 2005），その判別は難しいとされる。このように「笑い」はそれ自体を面白さの指標にすることが難しいため，社会心理学研究ではこれまで「笑い」に注目することはあまりなかった。しかし笑いは，他者の意図や被害結果を推測するための情報として用いられる。例えば，あいまいな笑いを判別するために，ひとは他者との関係性を手がかりとして利用していることが示唆されている。周囲の笑いの発信源（内集団か外集団）が知らされた場合，同じ笑いでも内集団より外集団からのものと認識する方が，ユーモアの面白さが減少した（Platow, Haslam, & Both et al., 2005）。このように，ユーモアの発信者や受信者の周囲で笑いを示す第3者を扱った攻撃的ユーモアの研究は，少ないが存在する。第3者とは，発信者でも受信者でもなく直接会話には関与しないが，周囲で反応を示す観察者や聴衆と呼ばれる立場である。他にも，観察者の笑いが無い方が，発信者と受信者の攻撃的ユーモア解釈のズレが減少したという結果も報告されている（Kim, & Palomares, 2022）。

これらの周囲の笑いに関する研究結果から，笑いが2種類の内のどちらであっても，ユーモアの面白さは周囲の笑いをどう認識するのかという，受信者の主観的な解釈に依存していると推測される。従って，社会心理学的研究における笑いは面白さの指標としてよりも，集団への社会適応という進化的視点から，受信者の意図推測に影響を与える情報として検討する必要があるだろう。また，主観的な笑いの解釈を関連要因として検討する場合，そこに期待によるバイアスや意図の透明性の錯覚が存在する可能性がある。例えば，相手の笑いを過剰に同意したものとみなす発信者のバイアスや，自分の笑いの意図が過剰に相手に伝わっていると認識する受信者のバイアスなどが考えられる。

このように，周囲の笑いは受信者にとっての適応のための情報として，被害結果の判断や面白さの評価などと関連することが示唆される。従って，攻撃的ユーモアの周囲に存在する笑いの主観的な解釈と意図性との関係についても，今後より詳しい研究が望まれる。

以上4つの領域の先行研究を基に，進化的視点から研究課題を指摘し，解決の方向性について議論してきた。次節はこれらをまとめ，全体の考察を行う。

6. まとめと今後の課題

本稿では，集団における社会適応という進化的視点を，ユーモアの対人的機能を検討するための重要な枠組みと捉え，進化的視点から ⑴尺度を用いた個人のユーモア特性，⑵対人関係におけるからかい，⑶ユーモアの機能の過程を想定した誹謗中傷ユーモア，⑷情報としての笑い，という4つの領域の先行研究を見直した。その結果，発信者や受信者という「立場」の観点や，また同じ立場によっても短期的な適応性もしくは長期的な適応性の結果かといった時間的観点によって，適応的になる場合も，不適応になる場合もあることが明らかとなった。このような研究結果の背景には，遊びの状態という共有認識を抜け道的に解釈することで，向社会的な目的と反社会的な目的を同時に達成できるという，攻撃的ユーモア独自の逆説的な特徴があることが推測された。

ユーモア特性の研究では，攻撃的ユーモアが不適応であることが前提とされ，この逆説的な特徴が考慮されていないことによって，尺度の問題点や一貫した結果が得られない，適応的側面の検討が不十分であるという研究課題があることを指摘した。これを解決する鍵として，ユーモアの目的である動機や意図が重要な役割を担っている可能性を示唆した。しかし，この意図の推測に影響を与える親密度や感情についての要因の検討はまだ充分とは言えず，バイアスや社会的望ましさの要因については，影響が予想されるがまだ直接検討されていない。従って，今回指摘した課題の解決のためには，意図性に関連するこれらの要因の影響について明らかにしていく必要がある。

今回，攻撃的ユーモアに関連する笑いを扱った研究を取り上げた。集団への社会適応という進化的視点から，受信者の意図推測に影響を与える情報としての周囲の笑いには，注目する必要があることも指摘した。

本稿の限界として，扱った先行研究は社会心理学領域のなかでも4つの領域に限定される議論であり，ここでは扱いきれなかった攻撃的ユーモアに関する領域や関連要因も存在する。例えば，皮肉・ヘイトスピーチに関する研究や文化・ジェンダーに関する要因などである。

今回は攻撃的ユーモアに関する限定的な領域ではあったが，集団適応という進化的視点から見直すことによって，個人を対象とした攻撃的ユーモアに関する研究課題に対しても，その解決の方向性が十分に示唆された。このように

他者との関わりという集団への社会適応の枠組みは，ユーモアの対人機能研究だけでなく，個人のユーモアを扱う研究においても有用である。今後も，それぞれの領域の知見を相補的に活用し，攻撃的ユーモアの対人的機能について，更に理解を深める必要がある。

引用文献

Alexander, R. (1986). Ostracism and indirect reciprocity: The reproductive significance of humor. *Ethology and Sociobiology*, 7, 253-270.

Almagro, M., Hannikainen, I. R., & Villanueva, N. (2022). Whose Words Hurt? Contextual Determinants of Offensive Speech. *Personality and Social Psychology Bulletin, 48*(6), 937–953.

雨宮俊彦（2014）．リバーサル理論と笑いとユーモアの身体的基盤について ― 感情の相互作用モデルからの展望 ― 関西大学心理学研究，5, 17-27.

Bateson, G. (1955). A THEORY OF PLAY AND FANTASY. *Psychiatric Research Reports, 2*, 39–51.

Borgella, A. M., Howard, S., & Maddox, K. B. (2020). Cracking wise to break the ice: The potential for racial humor to ease interracial anxiety. *Humor, 33*(1), 105–135.

Campbell, L., & Moroz, S. (2014). Humour use between spouses and positive and negative interpersonal behaviours during conflict. *Europe's Journal of Psychology, 10*(3), 532–542.

Cann, A., Calhoun, L. G., & Nance, J. T. (2000). Exposure to humor before and after an unpleasant stimulus: Humor as a preventative or a cure. *Humor, 13*(2), 177–191.

Cann, A., Davis, H. B., & Zapata, C. L. (2011). Humor styles and relationship satisfaction in dating couples: Perceived versus self-reported humor styles as predictors of satisfaction. *Humor, 24*(1), 1–20.

Casu, G., & Gremigni, P. (2012). *Humor measurement*. In Paola Gremigni (Editor). *HUMOR AND HEALTH PROMOTION*, Nova Science Publishers, Inc. New York, pp. 253-274.

de Koning, E., & Weiss, R. L. (2002). The Relational Humor Inventory: Functions of humor in close relationships. *American Journal of Family Therapy, 30*(1), 1–18.

Dunber, R. I. M. (1996). *Grooming, gossip and the evolution of language*. London: Faber and Faber.

Endo, Y. (2007). Divisions in subjective construction of teasing incidents: Role and social skill level in the teasing function. *Japanese Psychological Research, 49*(2), 111–120.

遠藤由美（2008）．共有状況下での相対比較判断におけるバイアスと自己中心性の役割 実験社会心理学研究，47(2), 134-144.

Ferguson, M. A., & Ford, T. E. (2008). Disparagement humor: A theoretical and empirical review of psychoanalytic, superiority, and social identity theories. *Humor, 21*(3), 283–312.

Ford, T. E., & Ferguson, M. A. (2004). Social Consequences of Disparagement Humor: A Prejudiced Norm Theory, *Personality and Social Psychology Review, 8*(1), 79-94.

Ford, T. E., Richardson, K., & Petit, W. E. (2015). Disparagement humor and prejudice: Contemporary theory and research. *Humor, 28*(2), 171–186.

Ford, T. E., Teeter, S. R., Richardson, K., & Woodzicka, J. A. (2017). Putting the brakes on prejudice rebound effects: An ironic effect of disparagement humor. *Journal of Social Psychology, 157*(4), 458–473.

Ford, T. E., Woodzicka, J. A., Petit, W. E., Richardson, K., & Lappi, S. K. (2015). Sexist humor as a trigger of state self-objectification in women. *Humor, 28*(2), 253–269.

Gervais, M., & Wilson, D. S. (2005). The evolution and functions of laughter and humor: A synthetic approach. *Quarterly Review of Biology, 80*(4), 395–430.

Gilovich, T., Savitsky, K., & Medvec, V. H. (1998). The Illusion of Transparency: Biased Assessments of Others' Ability to Read One's Emotional States. *Journal of Personality and Social Psychology, 75*(2), 332–346.

Hack, T., Garcia, A. L., Goodfriend, W., Habashi, M. M., & Hoover, A. E. (2020). When It Is Not So Funny: Prevalence of Friendly Sexist Teasing and Consequences to Gender Self-Esteem. *Psychological Reports, 123*(5), 1934–1965.

Haugh, Michael (2017) Teasing. In Salvatore Attardo (ed.), *Handbook of Language and Humour* (pp.204-218), Routledge, London.

葉山大地・桜井茂雄（2008）．過激な冗談の親和的意図が伝わるという期待の形成プロセスの検討 教育心理学研究，56, 523-533.

Hay, J. (2000). Functions of humor in the conversations of men and women. *Journal of Pragmatics, 32*, 709-742.

本郷亜維子（2019）．ユーモアコーピング尺度の作成と信頼性・妥当性及びユーモアスタイルとの弁別性の検討 笑い学研究，26, 74-86.

飯田高（2016）．社会規範と利他性 ―その発現形態について― 国立大学法人東京大学社会科学研究所 社会科学研究，67(2), 23-48.

Keltner, D., Young, R. C., Heerey, E. A., Oemig, C., & Monarch, N. D. (1998). Teasing in hierarchical and intimate relations. *Journal of Personality and Social Psychology, 75*(5), 1231–1247.

Kim, I., & Palomares, N. A. (2022). The Role of a Bystander in Targets' Perceptions of Teasing Among Friends: Are You Really Teasing Me? *International Journal of Communication, 16*, 3942-3960.

Korotkov, D., & Hannah, T. E. (1994). Extraversion and emotionality as proposed superordinate stress moderators: A prospective analysis. *Personality and Individual Differences, 16*(5), 787–792.

Koszałkowska, K., & Wróbel, M. (2019). Moral judgment of disparagement humor. *Humor, 32*(4), 619-641.

Kruger, J., Gordon, C. L., & Kuban, J. (2006). Intentions in teasing: When "just kidding" just isn't good enough. *Journal of Personality and Social Psychology, 90*(3), 412–425.

Kruschke, J., & Vollmer, A. (2014). Moral Foundation Sensitivity and Perceived Humor. https://ssrn.com/abstract=2519218

Kuiper, N. A., Kirsh, G. A., & Leite, C. (2010). Reactions to Humorous Comments and Implicit Theories of Humor Styles. *Europe's Journal of Psychology, 6*(3), 236-266.

Kuiper, N. A., Martin, R. A., & Olinger, L. J. (1993). Coping humour, stress, and cognitive appraisals. *Canadian Journal of Behavioural Science/Revue Canadienne Des Sciences Du Comportement, 25*(1), 81–96.

椙本知子・山崎勝之（2010）．対人ストレスユーモア対処尺度（HCISS）の作成と信頼性，妥当性の検討 パーソナリティ研究，18(2), 96-104.

Martin, R. A. (2001). Humor, laughter, and physical health: Methodological issues and research findings. *Psychological Bulletin, 127*(4), 504–519.

Martin, R. A. (2007). *The Psychology of Humor*. Elsevier Inc.（マーティン，R. A. 野村亮太・雨宮俊彦・丸野俊一（監訳）．（2011）．ユーモア心理学ハンドブック 北大路書房）

Martin, R. A., Puhlik-Doris, P., Larsen, G., Gray, J., & Weir, K. (2003). Individual differences in uses of humor and their relation to psychological well-being. *Journal of Research in Personality, 37*, 48-75.

Martin, R. A., Lastuk, J. M., Jeffery, J., Vernon, P. A., & Veselka, L. (2012). Relationships between the Dark Triad and humor styles: A replication and extension. *Personality and Individual Differences, 52*(2), 178–182.

Martin, R. A., & Lefcourt, H. M. (1983). Sense of humor as a moderator of the relation between stressors and moods. *Journal of Personality and Social Psychology, 45*(6), 1313–1324.

Mendiburo-Seguel, A., & Ford, T. E. (2019). The effect of disparagement humor on the acceptability of prejudice. *Current Psychology: A Journal for Diverse Perspectives on Diverse Psychological Issues*. https://doi.org/10.1007/s12144-019-00354-2

McGraw, A. P., & Warren, C. (2010). Benign Violations: Making Immoral Behavior Funny. *Psychological Science, 21*(8), 1141–1149.

Newman, M. G., & Stone, A. A. (1996). DOES HUMOR MODERATE THE EFFECTS OF EXPERIMENTALLY-INDUCED STRESS? *Annals of Behavioral Medicine, 18*(2), 101–109.

Nezu, A. M., Nezu, C. M., & Blissett, S. E. (1988). Sense of Humor as a Moderator of the Relation Between Stressful Events and Psychological Distress: A Prospective Analysis. *Journal of Personality and Social Psychology, 54*(3), 520–525.

Platow, M. J., Haslam, S. A., Both, A., Chew, I., Cuddon, M., Goharpey, N., Maurer, J., Rosini, S., Tsekouras, A., & Grace, D. M. (2005). "It's not funny if they're laughing": Self-categorization, social influence, and responses to canned laughter. *Journal of Experimental Social Psychology, 41*(5), 542–550.

Ruch, W., & Heintz, S. (2017). Experimentally manipulating items informs on the (limited) construct and criterion validity of the humor styles questionnaire. *Frontiers in Psychology, 8*. Article 616.

Smoski, M. J., & Bachorowski, J.-A. (2003). Antiphonal laughter between friends and strangers. *Cognition and Emotion, 17*(2), 327–340.

Sprecher, S., & Regan, P. C. (2002). Liking some things (in some people) more than others: Partner preferences in romantic relationships and friendships. *Journal of Social and Personal Relationships, 19*(4), 463–481.

Swim, J. K., Scott, E. D., Sechrist, G. B., Campbell, B., & Stangor, C. (2003). The Role of Intent and Harm in Judgments of Prejudice and Discrimination. *Journal of Personality and Social Psychology, 84*(5), 944–959.

武田美亜（2009）．共通基盤知覚がさまざまな内的経験の透明性の錯覚に及ぼす影響 対人社会心理学研究，9, 55-62.

武田美亜・沼崎誠（2007）．相手との親密さが内的経験の積極的伝達場面における2種類の透明性の錯覚に及ぼす効果 社会心理学研究，23(1), 57-60.

Thomae, M., & Pina, A. (2015). Sexist humor and social identity: The role of sexist humor in men's in-group cohesion, sexual harassment, rape proclivity, and victim blame. *Humor, 28*(2), 187–204.

Thorson, J. A., & Powell, F. C. (1993). Sense of humor and dimensions of personality. *Journal of Clinical Psychology, 49*(6), 799–809.

塚脇涼太（2018）．攻撃的ユーモアはポジティブな対人的機能を持つのか：相手との親密度と攻撃的ユーモアの攻撃度からの検討 対人コミュニケーション研究，6, 13-28.

塚脇涼太・平川真（2012）．ユーモア表出及びその動機と心理社会的健康 パーソナリティ研究，21(1), 53-62.

上野行良（1992）．ユーモア現象に関する諸研究とユーモアの分類化について 社会心理学研究，7(2), 112-120.

Vaid, J. (2002). Humor and Laughter. *Encyclopedia of Human Brain, Volume2*, 505-516.

Weisfeld, G. E. (1993). The adaptive value of humor and laughter. *Ethology & Sociobiology, 14*(2), 141-169.

Wild, B., Rodden, F. A., Grodd, W., & Ruch, W. (2003). Neural correlates of laughter and humour. *Brain* (Vol.126, Issue 10, pp. 2121–2138). Oxford University Press.

吉田昂平（2012）．日本語版ユーモアスタイル質問紙の作成 笑い学研究，19, 56-66.